



宮澤清治著
朝雨は女の腕まくり
 ー日本の天気図ー

井上書院出版 1986年10月刊
 B 5変判 199頁 1200円

本書の題名は、「これからも語り継いでほしい天気のことわざから取った」と、あとがきにある。「朝雨」とは局地的に朝のうちだけ降る一時的な雨で、すぐ晴れるので女性の腕まくり同様怖くないとの意味らしく、本書の第五章「実用ことわざ100選」の中で解説している。

著者の横顔については、テレビ・ラジオの天気解説を通じてすでにご存知の方が多く、長期間一貫して現場の天気予報業務に携わってきた人であり、元予報官といわれる人でもこれ程予報一筋で過した人はそう多くはない。これだけの予報経験があれば、天気予報については確固たる自信を持っているかという、決してそうではない。著者の天気解説を聞いて感じるとおり、天気予報に対して非常に慎重であり、予報の限界を良く知っている人である。

ここ数年の間に、テレビ・ラジオ・新聞等の気象番組・天気解説欄が充実され、気象衛星画像・アメダスデータ・レーダー画像が直接茶の間で見られるようになった。著者は、「気象庁が発表する予報をそのまま受け取るのではなく、貴重な税金を使って得られるこれらデータを利用して、自分の目的に合わせて、自分で天気予報を考える時代がやってきたのではないか」と呼びかける。テレビ等から得られる気象情報に加えて、自分のまわりで観察できる最新の天気実況を合わせ判断することにより、個人用の予報を考えることは大変有意義なことといえよう。そのための基礎的な事柄について、主に第3章「天気の子報」の中でやさしく解説しており、豊富な予報経験を持つ著者の天気図の見方・予報法が誰にでもよく読み取れる。例えば「大雨」の項では、大雨の降りやすい場所・時間帯・気圧配置等が、過去の事例をいくつもあげて解説してあり、また「大雪」の項では、里雪・山雪型それぞれの天気図を示して、注目すべき要点を教えてくれる。現役予報官の一員である私にとっても、参考になるものである。これらは、ラジオの気象通報を聞いて天気図を描く人、あるいはテレビの天気図・衛星画

像・アメダスデータ等を見て予報を考える人にとっても、大変参考になると思われる。

現在の予報技術では、局地的に起る集中豪雨の発生を市町村名を限定して予報することはほとんど不可能であるが、九州北部とか四国地方といった広域をさして“大雨が降りやすい”との情報は、多くの場合かなりの確からしさをもって事前に発表されている。このような場合、当然なことではあるが、各県の気象台は注意深く監視を続け、警報等を発表するが、同一県内でも豪雨が起る所とそうでない所がある。そこで、著者は、テレビ等から得られる気象情報に加えて、国民一人一人が身の回りの気象状況の推移に注意することが大切であると呼びかけており、身近で起るささいな気象の変化にも目を向けてもらおうと、わかりやすく解説している。著者の予報経験を基にした記述、特に気象災害につながる顕著現象の予報についての記述は、これから予報を担当しようとする専門家にとっても有益な知識となろう。

私自身が予報官のためか、第3章に関する紹介に偏ったきらいがあるが、この他に第1章「お天気歳時記」では、春夏秋冬の各季節に身の回りで起る気象現象について解説しており、それらの現象が実際に起きた時の天気図とともにそれぞれの観測データも示している。知らぬ間に気象好きにさせられる感がある。また、第2章「天気の観察」では、気温・湿度・気圧・風・雨・雪・雲の観察とアメダス、レーダー、気象衛星による観測のしくみ等を解説し、第4章「天気と暮らし」では落雷・波浪・気象病・結露等から身体や暮らしを守る工夫等についてふれている。さらに、最終の章に、全国各地に多く残されている天気に関することわざの中から100種を取り上げて解説するとともに、そのいくつかのことわざの適中率（信頼度）も付加している。風・雲・空気の湿り気・気温等、身体で感じるかすかな変化を天気変化に結び付けたことわざは、何事にもせかせかと急ぎ、また空調のきいた部屋に暮らす現代では忘れられていく運命かも知れないが、著者は、かえってこれらのことわざが国民総予報官時代には、有効に利用できるのではないかと書き、「半鐘」の音で危険を知った昔の人の方が予報能力が優れていたということがないようにしたいと結んでいる。

(気象庁予報課 飯島邦彦)